

BAJI

八级

高等院校日语专业 考试辅导

阅读·翻译大揭秘

本册主编 魏丽华 王超伟 臧运发

丛书主编 胡振平



大连理工大学出版社

Dalian University of Technology Press

高等院校日语专业八级考试辅导

阅读·翻译大揭秘

本册主编 魏丽华 王超伟
臧运发

大连理工大学出版社

© 胡振平 2004

图书在版编目(CIP)数据

阅读: 翻译大揭秘 / 魏丽华, 王超伟, 臧运发主编. — 大连:
大连理工大学出版社, 2004. 9
高等院校日语专业八级考试辅导
ISBN 7-5611-2697-2

I. 阅… II. ①魏… ②王… ③臧… III. ①日语—阅读教学
—高等学校—水平考试—自学参考资料 ②日语—翻译—高等学
校—水平考试—自学参考资料 IV. H360. 42

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2004)第 039855 号

大连理工大学出版社出版

地址: 大连市凌水河 邮政编码: 116024

电话: 0411-84708842 传真: 0411-84701466 邮购: 0411-84707961

E-mail: dutp@ dutp. cn URL: <http://www.dutp.cn>

大连理工印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸: 140mm × 203mm 印张: 11 字数: 255 千字

印数: 1 ~ 6 000

2004 年 9 月第 1 版

2004 年 9 月第 1 次印刷

责任编辑: 宋锦绣 于福岳

责任校对: 李 丽

封面设计: 孙宝福

定 价: 20.00 元

总 目 录

阅 读

◆使用说明	3
◆应试指导	4
第一部分:综合练习	11
第二部分:例文点评	131
第三部分:参考答案	143

翻 译

◆使用说明	151
第一部分:汉译日	153
第二部分:参考译文	271

文 语

◆使用说明	303
文语部分	305
文语部分参考书目	343

高等院校日语专业八级考试辅导

阅读·翻译大揭秘

阅 读

阅读 ● 目录

◆使用说明	3
◆应试指导	4
第一部分:综合练习	11
综合练习(一)	12
综合练习(二)	19
综合练习(三)	26
综合练习(四)	32
综合练习(五)	41
综合练习(六)	46
综合练习(七)	52
综合练习(八)	60
综合练习(九)	66
综合练习(十)	72
综合练习(十一)	77
综合练习(十二)	82
综合练习(十三)	88
综合练习(十四)	93
综合练习(十五)	99
综合练习(十六)	105
综合练习(十七)	110
综合练习(十八)	115
综合练习(十九)	120
综合练习(二十)	125
第二部分 例文点评	131
第三部分 参考答案	143

使用说明

本部分为日语四、八级统测系列辅导丛书之八级阅读辅导部分。鉴于高年级阅读能力的实际水平及八级考试的特点,选编的文章均来自日本高中升大学的考试题或辅导题。

较之于四级阅读,八级阅读更重视考察学生的综合能力。这其中不仅包含语言能力,更重要的是分析能力、逻辑推理能力等等。因此可以说八级的阅读,与其说是对外语能力的考核,不如说是对母语与外语综合知识与能力的评价。本书所选文章题材广泛,学生可以通过练习测试自己,发现不足,力求使阅读能力有所提高。

因字数所限,只选定两篇文章为范文做了点评。但每篇文章后都附有阅读小技巧。

应试指导

1 样题

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

何よりも人間の自然としての「立つ」ことは、常に一切の^{あいかん}哀歎を納めた世界に対するひとつの抵抗である。人間を取りかこむもろもろの対象は、人間よりはるかに安らかに、地の上に横たわっている。名園のひとつの石を前にした時、われわれが感じるのはそのもつ安定感によって心を洗われることである。(イ)人間の条件は、ヘルダーリンの名作『ヒューペリオン』の内から、ブラームスによって作曲された「運命の歌」にあるように、「されどわれらに与えられるのは、いかなる場所にも休まらえざること」なのである。「立つ」人間には、^{じょうど}浄土^{しほ}への思慕はあっても^{しっかい}悉皆、安らいというものはない。人性の^{きょじつ}虚実の相を前にして、平安の内に「立場」を維持することを学ばねばならないのである。立つことによって人間は手を解放し、(ロ)^{ざいしょう}罪障への自由を得るが、<a>それは大地との和解のひとつの喪失でもある。(ハ)人間には、冷たい太母としての大地への^{しょうけい}あらいがたい憧憬があり、交情がある。

(A)ことは人間を大地よりひきはなし、あらゆるものに対して距離をとよせ、その相互の関係を探る合理主義を与えた。科

学はここにはじめて可能になる。しかし、他方、人間はたえず直立しているだけで、(B)ことをしなければ、そこにち^{きよう}倨傲、嚴格、硬直^{こうちよく}が感じられ、心のかすかな通いもできなくなる印象を与えてしまう。およそすべての現象、天地の消息ですら、常に(B)運行ではないだろうか。立ちながらも、事物や他者に(B)ことが、はじめてわれわれを直立のたえがたい孤独から救うのである。そしてその「傾斜」を拡大し、(二) その臨界点でふたたび復元してこそ、人間は他者にむかって、たとえかりそめの出会いであれ、人生の往還を(C)ことができる。その行人の愛情は、移ろうものであるから、そのまま人間のよろきである。中国の^{じゆしや}儒者が「多感をおそれず、受感をおそる」と戒めているところであろう。

「立つ」ことの内に得られた自由は「歩み」の内に広げられる。しかしその自由とともに、転落の脅威も育つ。人間は片足で立っただけでもよろめいてしまう。動物の四足は安定がよく、重心が低い。走っている犬でも、虎でも、その重心は安定している。<1> 歩む人間は身体が前方へ傾き、未来へと振られる形で動く。 <2> 重心は一瞬失われるが、転倒が始まろうというその瞬間に前方に足が伸ばされ、ささやかな過去が生まれる。 人間の歩みはいわば信用の上になりたつ運動である。<3> ためらうものは身体の動きをとめようとするし、信ずるものは足下を気にせず歩みをなめらかにすすめ、(D)に対する<E>の恵みを予想している。(ホ)われわれは舞踏に、すなわち<4> 不

安定を借しげもなく振りまき、自由な躍動の内に均衡を保っている運動とその表現に、驚嘆きょうたんのまなざしをおくる。

「立つ」人間には多くの空間がひらかれる。人間は、人生観、世界観というように、文字通り人生や世界を<c>そこで「観る」のである。生の蒼茫そうほうとした大荒おおあれと無限の宇宙を前にして、人間の観るものは貧しいが、しかしあらゆる方向に人間は生きることができる。立つことは眼と耳とを地からひきはなし、<d>真の遠方への感覚とする。人間の視覚と聴覚とは、身辺のものから人をかりたてて、遥かなものへとおしやり、遠い地平から何万光年の星々の光に至り、さらに不可視の美を見たり、きこえざる音楽を聴く意味深いものとする。

問題：

- 文中の(イ)に入る言葉はどれか、A、B、C、Dの中から一番いいものを一つ選んで入れなさい。
A. それから B. それに C. まして D. しかし
- 文中の(ロ)に入る言葉はどれか、A、B、C、Dの中から一番いいものを一つ選んで入れなさい。
A. そして B. だから C. それで D. それなのに
- 文中の(ハ)に入る言葉はどれか、A、B、C、Dの中から一番いいものを一つ選んで入れなさい。
A. ところが B. もともと C. いまや D. および

4. 文中の(二)に入る言葉はどれか、A、B、C、Dの中から一番いいものを一つ選んで入れなさい。
A. かつ B. ですから C. でも D. それでは

5. 文中の括弧(ホ)に入る言葉はどれか、A、B、C、Dの中から一番いいものを一つ選んで入れなさい。
A. すると B. こうして
C. ましてや D. それにしても

6. 文中の(A)→(B)→(C)の組み合わせにあうものはどれか、A、B、C、Dの中から一番いいものを一つ選びなさい。
A. 「傾く」→「歩む」→「立つ」 B. 「立つ」→「傾く」→「歩む」
C. 「立つ」→「移ろう」→「歩む」 D. 「歩む」→「立つ」→「傾く」

7. 文中の(D)→(E)の組み合わせにあうものはどれか、A、B、C、Dの中から一番いいものを一つ選びなさい。
A. 「過去」→「現在」 B. 「過去」→「未来」
C. 「現在」→「過去」 D. 「現在」→「未来」

8. ____ <a>「それ」は次のどの語句を受けるか、最も適当なものを一つ選びなさい。
A. 罪障への自由 B. 人生の虚実の相
C. 立つこと D. 手の解放

9. ____ <c>「そこ」は次のどの語句を受けるか、最も適当なものを一つ選びなさい。
A. 舞踏 B. 運動 C. 表現 D. 空間

10. ____ に最も近い説明は、文中の下線部の<1> ~ <4>のうちのどれか、最も適当なものを一つ選びなさい。
- A. <1> B. <2> C. <3> D. <4>
11. ____ <d>「真の遠方への感覚」と同じ意味のものは、以下に続く次の語句の中のどれか、最も適当なものを一つ選びなさい。
- A. 遠い地平 B. 不可視の美
C. きこえざる音楽 D. 人間の視覚と聴覚
12. 全文の要旨として、最も正しいと思われるものを、次の中から一つ選びなさい。
- A. 人間は、「立つ」ことによって大地との和解を喪失したが、それを代償として、真の遠方への感覚を獲得することができた。
- B. 「立つ」ことは人間の重心を高くし、四足の動物のように重心の低いものにくらべて、行動力がいちじるしくそこなわれることになった。
- C. 人間が大地への強い憧憬を持っているのは、「立つ」こと「歩む」こと以前に、「横たわる」状態があったからである。
- D. 人間は、「立つ」ことによって手を解放した結果、合理主義や科学を獲得することができた。

2. 分析

问题1选项中的四个接续词中只有D是表示逆接关系。回到文章中,前文“安定感によって心を洗われること”与后文的“休らえざること”正是逆接关系,答案自然为D。

问题2 答案的选择过程与第一题正相反。因为第二题的答案中虽然同样只有一个逆接表达,但前后文明显不是逆接关系。因此D首先被排除。剩下的三个答案中B表示因果关系,C同样也有因果关系的接续作用。而A表达的是前后项的继起关系。从原文中看,“手を解放し”与“罪障への自由”只符合继起关系。答案为A。

问题3 中A表示转折,B意为“原本”,C意为“现在、现在已经”,D表示并列。A明显是错误的,C也不符合,D放入文章中也不通顺。这样排除下来只有B了。

问题4 中,“「傾斜」を拡大する”与“その臨界点でふたたび復元して”是递进的关系,只有A符合。

问题5 因为前文就有空格选择,所以较前几题难度较大。这种情况下最好使用排除法。从后文来看,A、B、C、D中,A首先可以排除。B的接续关系与A相似,B也可以大胆排除掉。D是逆接关系。虽然前文不完整,但从大体意义上看来,前后文不存在逆接的可能。结果可将答案定为C。

问题6 类的组合选择,一般情况下可采用两种答题方式。一种是在阅读过程中填好空,与答案对比。这种方法一般在文章较简单易理解时采用。另一种就是比较答案的区别。本文较难,就采用第二种办法。四个答案中,B、C的第一个空格答案相同。将其放回文章中,符合原文。这样选项就剩下两个。这两个的区别在第二个空。再次返回原文,可以得出B是惟一答案。

问题7 同样为组合题。首先确定第一个空的选择。注意前文中的“信用”与后文的“恵み”这两个关键词。再看一下“未来へと振られる”和“ささやかな過去が生まれる”这两句话,答案锁定为D。

问题8 考查的是指示代词的指代内容问题。前文一直围绕“立つこと”展开说明,因此答案只能为C。其余的答案均不完

整。

问题 9 的答案比较明显,为 D。

问题 10 的大体关键词是“臨界点、復元”,答案为 B。

问题 11 中,只要对照前文中的“眼と耳と”的表达,就可以得出答案为 D。

问题 12 是考查对全文的总体把握。B、C 首先排除。A、D 当中,A 所表达的内容基本上包括了全文,因此答案为 A。

3. 出题倾向与对策

八级的阅读理解所选文章表达更书面语化,内容更为抽象。与四级相比,难度有了很大提高。这样,答题技巧的选择也相当重要。对于接续词的选择一定要立足于前后文的逻辑关系。在日常的学习当中,接续词的掌握就要从日语的意义解释出发,不能仅仅停留在中文意义的解释上。另外,对于指示代词的考核,要注意抓住原文中的关键词,切忌以“点”盖“面”。对于自己很难决断的答案,要善于用排除法。

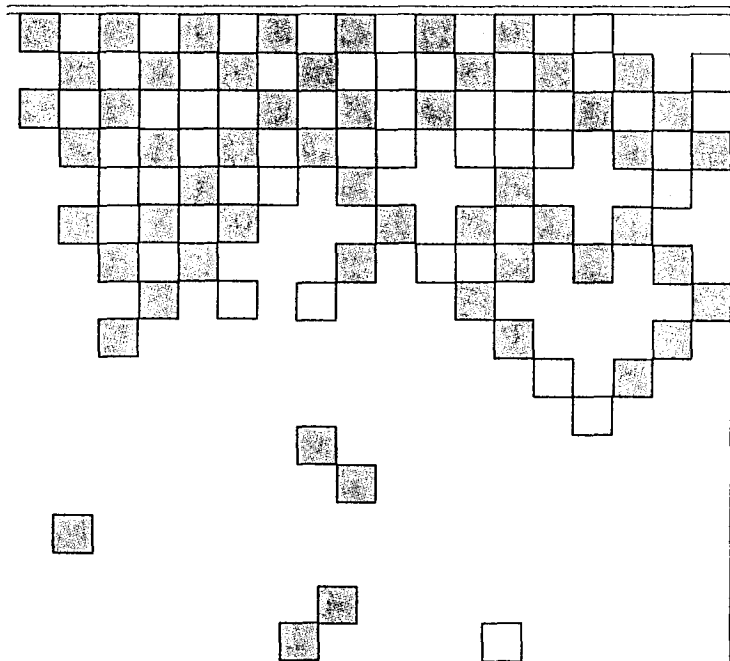
当然,随着语言学习的深入,对文章的理解不仅仅需要外语的知识,从母语中获得的综合知识对文章的理解也非常重要。高级阶段的语言能力的提高绝对离不开综合能力这个基础平台。因此希望同学们在日常的学习当中就要博而精。多读书、多思考,语言能力自然就会提高。

高等院校日语专业八级考试辅导

阅读·翻译大揭密

第一部分

综合练习



综合练习(一)

われわれ日本人はいま、^{すいたいろん}衰退論と聞けば、どうしても「後ろ向きの議論」だと思いがちである。しかし、これこそが実は衰退の真の証だと言わねばならないのである。その社会が活力を精神面でより顕著に失ったとき、振り払おうとしても^{ほうはい}澎湃と湧き起こってくるのが「衰退への恐れ」だからだ。逆に自らが衰退の「兆し」を見せたとき、まずその可能性に正面から立ち向かおうとする場合、それはまだその社会に活力が残っている証拠なのである。つねに衰退の可能性を恐れるのは現実を直視しているからで、直視することを厭うようになったときが本当に危険な時期だといえる。(a)、衰退論とは後ろ向きのネガティブな議論ではなく、実は前向きのポジティブな議論であり、絶えざる再生の試みなのである。

ただし、自らの衰退を正確に認識せよ、というのはたやすいが実際にはなかなか困難なことである。自らの衰退を見つめるといことが心理的にも至難の業であるだけでなく、衰退にはいくつかの異なったパターンがあるからだ。

古代ローマやベネチアの衰退、あるいはスペイン、イギリスの衰退、(b)、ビザンチンや中華帝国の衰退があり、ひとつの衰退のパターンを知ればすべてが予測できるというものではない。また、歴史上のこうした巨大な世界帝国が衰退から衰亡へと向かうマクロ・ヒストリー(長大な世界史)とは別に、近代的な先進工業社会に生じる一時的衰退から再生へのプロセスを取り上

げる衰退克服の政策過程を対象とする歴史という視点もある。ただ、そこにはやはり(c)「衰退」とは何かを考えてゆくとき①共通する要素がいくつも見られることも否定できない。

ある社会なり文明の衰退を考える際に、やはり多くの示唆を与えてくれるのがアーノルド・トインビー(1889~1975)の文明論であろう。トインビーは、これまで地球上に現れた文明を詳細に調べて、文明の発生・成長と並んでその衰退の本来的原因やその本質をきわめて抽象度の高い議論にまで練り上げている。

彼の主著である『歴史の研究』の第一巻第十六章は社会衰退の最大の要因のひとつとして、「自己決定能力の喪失」というテーマについて論じているが、ここでまず注目すべきは、「文明の衰退には不可抗力はない」と指摘している点だ。つまり(d)といった宿命論しゅくめいろんが誤りであり、どうしようもなく不可避免的な衰退というものもなく、またすべての文明や国家が衰退するわけではない、ということである。つまり、衰退するのには理由があるからで、偶然や突発事あるいは自然な生理によって衰退を余儀なくされるというものではない、ということなのだ。

たとえば、最近の日本での議論には、「技術」をきわめて高く評価し、技術の衰退がその社会を衰退させる、と論じるものもあるが、トインビーにいわせれば、そのような例は史上にひとつもない。また、外敵の突然の侵入によって民族が一掃いっそうされ、文明が地上から消滅してしまった、という例も存在しないのである。

トインビーは、たとえそのような事態が生じたとしても、「種子」が残されていれば文明は必ず復活すると述べている。たとえその文明を大ならしめた技術が退化しても、蛮族ばんぞくあるいは一